



がんに罹患したら、まずは会社へ相談を

50代 男性 下咽頭がん

2023年8月に下咽頭がんに罹患し、病期はステージⅣAと診断されました。ちょうどこの時期は、コロナも下火になりかけており、会社への出勤も増えてきた頃で、がんに罹患したのはそんな矢先の出来事でした。

今迄、大病を患ったことが無かったため、まさに青天の霹靂であり強い衝撃を受けた事を記憶しています。真っ先に考えたのは仕事の事で、辞めるべきか悩みました。その後、精密検査を経て、先生と仕事の事や治療法について打合せを行いました。「治療に専念するため、仕事はやめた方が良いのか」先生に相談したところ、「仕事をしながら治療している方もいる」との事で、自分だけで判断するのではなく会社と相談し、仕事をしながら治療する事を選択しました。

また、営業職でもあり、声が出なくなると仕事が出来なくなるため、手術ではなく抗がん剤と放射線2つを併用した治療を行う事に決定し治療を開始しました。リモートですが仕事を行いながらの治療で、抗がん剤投与日も仕事を続けかなり大変でした。特につらかったのは治療終盤の放射線治療の副作用により、大人でも我慢できないほどの喉の痛みが発生した時です。痛み止めを使用しながらの仕事は精神的にもつらかった事を記憶しています。

現在、検査結果は寛解状態にあり、経過観察で3か月に1回通院しています。仕事をしながらの治療は非常につらかったですが、今はあきらめないで良かったと感じています。家族の支えや会社の理解がなければ、絶対に両立は出来ませんでしたし、最後まで仕事と治療を続けることができた事に大変感謝しています。



妊娠中・出産後の乳がん治療を支えたもの

60代 女性 乳がん

私は25年前2人目を妊娠中に乳がんになりました。妊娠前、右腋下にしこりを見つけ、近くの病院を受診。その時は異常なしと言われましたが、妊娠後、そのしこりに違和感を覚え、改めて乳腺外科を受診したのです。診断結果を聞いた日は、天から地に落ちたような気持ちであったこと以外は全く記憶にありません。

大学病院に転院し、右乳房温存・リンパ節郭清術を受け、30週で早期出産をしました。抗がん剤治療のために初乳しかあげられず、抗がん剤入りの母乳が流れるたびに涙も流れました。退院後、傷口に紐があたり抱っこもおんぶも出来ず本当に気持ちはどん底でした。これ以上のどん底はないと、今は何があっても乗り越えられるような気がします。子どもがいたことで精神的に強くなり、治療中を過ごすことが出来たと感じています。

その当時、息子の成長過程で何かある度にがんになった自分を責め続けていましたが、息子は、幼稚園・小学校の送迎時いつもニコニコ笑顔で私に挨拶してくれていました。ある方から「僕は大丈夫だよって言ってるんじゃないの？」と言われ、胸のつかえがとれた気がしました。

平成26年から平成27年にかけて、右側温存乳房に新たに病巣が見つかり2度の手術。さらにその翌年、左側にも見つかり手術をしました。術後、また1からの治療で気持ちが沈みましたが、前と一番大きな違いは仲間がいるということです。

ひとりじゃありませんでした。仲間と家族のパワーに支えられ、一日一日を大切に今も歩んでいます。



どん底の私を救った、一步の勇氣

50代 女性 卵巣がん

私は卵巣がんを経験しました。腰痛をきっかけに複数の病院で検査を行い、紹介された病院の初診前に卵巣捻転を発症し、救急搬送された先の初めての病院で、緊急手術を受けました。

通常診断・治療開始とは異なり、意識が戻った時は状況が全く掴めず、病気の理解も不十分なまま、治療が始まった事実に向面しました。心の準備とは裏腹に治療は急速に進み、二度目の手術や化学療法が次々と行われていきました。また、コロナ禍の影響も重なり、精神的・社会的に深い孤立感を覚えました。家族や周囲も同じで、互いの心に乖離も生じ、全てがどん底でした。

患者サロンなどの交流の場に参加できたのは、治療が全て終わってからです。最初は勇氣がいましたが、参加してみると、同じ病気を乗り越えた方々や、後遺症を乗り越える知恵を共有する方々との出会いがありました。何より、同じ経験をした方と気持ちを分かち合い、自身の感情を言葉にすることの重要性を痛感しました。また、不安に思うことも決して悪い事ではなかったのだと知りました。

この経験こそが、私の精神的な回復に不可欠なものであったと確信しています。あの時、一步踏み出して交流の場に参加したことが、自身の心と体の状態を改めて理解するきっかけとなりました。

もし今、病気や治療で不安や悩みを抱えている方がいらっしゃるなら、患者サロンなどのピア・サポートの場に参加してみるのも一つの方法です。ご自身に合う患者サロンをぜひ見つけてみてください。